

精神薄弱教育史研究序説 II

—アメリカにおける精神薄弱教育史学史—

津 曲 裕 次

はじめに

著者は、さきに、「精神薄弱教育史研究序説——白痴教育史序章——」（津曲、1975）として、日本における精神薄弱教育史に関する諸研究を考察した。そのねらいは、精神薄弱教育史に関する先行研究を総括することによって、精神薄弱教育史研究の意義、課題、方法等を明らかにし、ひいては、筆者の研究課題である白痴教育史の序章とすることにあつた。こうした意図とその結果について、きびしい批判が寄せられた。特に、歴史研究の意義や課題としてまとめられたことが、先行研究の考察と十分に結びついていないという批判は、今後の研究を進めるうえでの頂門の一針となつた。

こうした批判には、いづれ、稿を改めておこたえしたいが、同論文は、大きな課題をあとに残した。すなわち、日本において、精神薄弱教育が、欧米諸国においてよりも約半世紀おくれて成立するが故に、精神薄弱教育史の研究も、常に欧米における精神薄弱教育史の研究の影響下にあつたということである。日本における精神薄弱教育史そのものが、欧米の諸研究の祖述ではじまるし、その後もくりかえし、その影響があらわれる。たとえば、日本で最初の白痴教育史(石井、1904)、学業成績不良児教育史(乙竹、1910)、精神薄弱児教育史(山下佐平、1922)らは、それぞれ、欧米の諸研究の翻案、紹介である。特に、山下佐平の「精神薄弱児教育史」は、山下も文中でことわっているように、ウォーリンの『知能劣弱者問題』第1章「知能劣弱者処置の変化」(Wallin, J. E. W. 1917)の抄訳そのものであつた。

日本の精神薄弱教育史研究におけるかかる傾向は、三木(1937)を経て、戦後にももちこされ、大石(1968)、山下功(1970)らにももちこされる。特に、大石の論文は、カナーの「精神薄弱者の保護と研究の歴史」(Kanner, L. 1964)第2章の抄訳である。

こうした傾向は、戦後、独自の見解で精神薄弱教育史をつくりあげた人びとにも例外ではない。時代や地域をひろげ、関連領域として教育、医学、心理学、社会学などをとりこんで、いわゆる通史をつくりあげた杉田(1955, 1960, 1962, 1966)、西谷((1951, 1960)、また、「社会問題史観」に立つ、菅田・清水・津曲(1974)も、その構成、内容等において、欧米の諸研究、とりわけ、デイビス、(Davies, S. P. 1959)、カナー (Kanner, L. 1964)の影響をうけている。1960年代から、精神薄弱教育史論がみられ、地方史、人物史、施設史等、日本の歴史と現実をふまえた研究もみられるようになった(津曲・金子、1974)が、通史というレベルで考えれば、まだまだ欧米の研究の影響が大きいといわねばならない。

こうして、日本の精神薄弱教育史研究は、数多くの諸外国の歴史研究の影響のもとにすすめられているが、こうした影響を及ぼした研究を国別にまとめてみると、アメリカ、ドイツ両国の研究が一番多く、イギリスの研究が続くようである。最近では、ソビエトの障害児教育史研究が数多く紹介され、その成果にのっとつた研究もこれについている(大井・渡辺他、1976)

本研究は、こうした特徴をもつ日本の精神薄弱教育史研究の一環として、アメリカにおける精神薄弱教育史を史学史的に考察してみようとするものである。

I. 研究の視点と方法

筆者は、さきの論文(津曲、1975)において、日本の精神薄弱教育史研究は、(1) 歴史研究の意義、(2) 歴史研究の目的と課題、(3) 歴史要因と歴史観、(4) 史料観、(5) 時期区分の5点をめぐって、種々の立場があり、また、その相互批判において発展してきたことを明らかにした。それを、すこしくわしくのべれば、次のようである。

まず、精神薄弱教育研究における「歴史研究の役割」についての論議である。これは、「歴史研究者の歴史意

識」となつてあらわれるが、これには、大きくいて二つの立場がある。すなわち、一つは、それぞれの時代の制度、方法、定義などの背景を理解する方法としての歴史観であり、一つは、それぞれの時代の問題点の解決の方向をさぐるための研究としての歴史観である。後者の立場からは、精神薄弱教育も、歴史的、社会的事実であることから、歴史研究は、精神薄弱教育研究において、実験、調査などとならんで必要不可欠な方法(加藤, 1973)とされるに至った。

こうした二つの立場は、さらに、歴史発展の要因や時期区分にも、ちがった見解となつてあらわれた。前者は、歴史発展の要因を、大きくいて、科学の進歩とヒューマニズムの発展の二つと理解し、後者は、社会経済史的な事象にその発展要因を求め、いわゆる「社会科学的史観」(加藤 1972)に立つ。したがって、時期区分においても、前者は、精神薄弱教育の始源を人類史とともに書きおこし、古代、中世、近世、現代と一般史の区分で時期区分をすることが多いのに対し、後者は、近代社会の成立期を精神薄弱教育の成立期とする。史料へのアプローチにしても、前者が文献史的であるのに対し、後者は、社会経済に関する統計などを重視する。

しかしながら、通史というレベルでみればこうした相違点よりむしろ、欧米の研究の影響による史観、構成、時期区分、史料による共通性の方が大きい。したがって、本稿は、欧米における精神薄弱教育史研究の第一歩として、アメリカの精神薄弱教育史研究をとりあげ、(1) 歴史研究の目的、(2) 歴史観 (3) 史料批判 (4) 時期区分の4つの視点から考察する。分析の対象は、19世紀前半から現代に至るまでのアメリカにおける精神薄弱教育史の研究論文、著書で、特に、通史を指向しているものをとりあげる。

II. アメリカにおける精神薄弱教育史学史

1. 精神薄弱教育の歴史への関心の成立

世界史的にみて、精神薄弱教育は、19世紀中葉の欧米諸国における痴者教育としてはじまる。19世紀初頭には、当時の先進資本主義国たるアメリカ、イギリス、フランス等で、痴者の処遇が社会問題となり、それへの対応として、痴者教育論が生まれ、痴児学校が設立された。これらの過程で、数多くの主張、報告書、雑誌論文等が出されたが、これらは例外なく、痴者教育の歴史や、みづからも含めた実践や理論の変遷をまとめている。

1848年の世界で最初の公立痴児学校の設立に貢献したマサチューセッツ州のハウは、「痴児問題は全くあたらしい問題であり、科学的にも十分な説明がなされていない」(Howe, S. G.: 1848) とのべ、19世紀前半の欧州の諸実践を編年的に列挙している。ハウの諸報告書(1848, 1851)には、歴史研究としての意識はないが、内容は歴史的な記述が多く、ここですでに、フランス、スイス、プロシヤにおける痴児教育論を年代を追って述べている。したがって、フランスのペロム、フェリュ、フアレ、セガン、スイスのグッケンビュールなども、ここにみられるのである。(Howe, S. G., 1848)。さらに、ハウは、アメリカにおける初期痴児学校の設立過程を、関係史料を用いてまとめる (Howe, S. G., 1851) など、後世の通史の原型をもつくりあげた。

このように、精神薄弱教育の歴史への関心は、19世紀中葉の精神薄弱教育の成立とともににはじまる。その理由は、精神薄弱教育が、19世紀前半の社会の歴史的現象であったこと、言いかえれば、精神薄弱教育そのものに歴史性が内在していることによる(津曲, 1968)。かくて、19世紀中葉には、歴史研究としての意識、史料批判、時代区分等はみられないまでも、みづからの実践の指針、主張の裏付けを過去に求めるという意味での関心が生じ、内容的に人物、思想、制度を列挙する通史のパターンが成立したのである。

2. 精神薄弱教育の歴史的研究の成立

アメリカの精神薄弱教育は、19世紀の後半に入って、一つの転機をむかえる。それは、1840年代の後半に成立した痴者教育が、ほぼ20年の実践のまとめをする時期に到達したということであり、人的にも、創設のころ活躍した人々から、新しく痴者教育の領域へ入ってくる人々への引きつぎがなされる時期に入ったことでもある。かくて、1860年代後半から痴者教育の専門書や雑誌論文数多く出されるようになった。1870年代のおわりには専門誌や各種団体の年報の創刊もみられるようになる(Kanner, L. 1964)。

こうした文献は、痴者の定義、教育原理、方法、制度など、痴者教育全般を扱うが故にそのどこかで、歴史にふれた。1866年に出されたセガンの『痴、その生理学的方法による処遇』(Seguin, E., 1866)は、精神薄弱教育のマグナ・カルタといわれ、その後の精神薄弱教育に多大の影響を及ぼした著書である。痴の定義、教育法、制度などにふれた同書には、まだ歴史の章はないが、その序文は、歴史そのものである。セガンは、序文の目

的を、①科学的痴者教育の起源、②痴児学校、普通学校における機能教育の思想史を明らかにすること、とし、内容を19世紀前半のアペロンの野生児の教育から、セガンのアメリカにおける実践までで構成している。ここでは、ハウの場合と同じく、アメリカ中心ながら、ドイツ、フランス、イギリス、スコットランドなどの歴史にもふれている。

セガンは、歴史を本論への序として位置づけたが、なお、史料批判、時期区分にはふれていない。史料についていえば、先にのべたハウの報告書とみづからの実践が主である。時期区分はほとんどみられないが、テーマ別に、現在から過去へさかのぼる叙述となっているところに一つの特色がある。また、時期区分に関連して、セガンは、痴者教育が19世紀前半に、世界各地で、一斉に成立したこと、そして、その要因として、①生理学の進歩、②教育権思想の成立、③障害児教育の進歩、④野生児教育の実験の4点をあげている。また、セガンが、コメニウス、ルソー、バスタロッチ、あるいは、ロック、コンディアックに言及しながら、常に、痴者教育史を、教育史または思想史一般と関連づけて考察していることも注目されてよいことである。

このように、セガンにおいて、なお、歴史研究としての意識はなく、また、歴史研究として整理されていないが、その後の精神薄弱教育史研究の視点が示されたといえる。

3. 精神薄弱教育史の成立

アメリカの精神薄弱教育は、19世紀末期から20世紀初頭にかけて、再び転機をむかえる。それは、痴者教育理論が批判されるとともに、個人差研究を中心とする心理学の進歩に支えられて、学業成績不良児教育が、制度及び理論として成立することを意味する。かくて、再び、数多くの著書、論文が、19世紀末期から20世紀初頭にかけて出されてくるが、こうしたなかで、精神薄弱教育史が研究として成立する。(Fernald, W. E., 1893)

精神薄弱教育史が、単独の論文または章、著書として出版されるのは、1890年ごろからのことであるが、これらは、およそ、次のような特徴を有していた。まず、構成として、①世界通史と②アメリカ通史が指向される。ついで、③これらの歴史的要因が語られ、④それによる時期区分が試みられる。しかし、⑤史料批判はなお、次の時代に残された。

①世界精神薄弱教育史の成立 すでにのべたように、ハウとセガンにおいても、地域的には、当時の文明諸国

の歴史を網羅する世界痴者教育史的構想があった。しかし、彼らにあっては、①とりあげる時代が19世紀初頭のアペロンの野生児からであって、それ以前をどう位置づけるか、ということ、及び、②これは、時代的制約でもあったが、痴者教育に加えて、学業成績不良児教育史をどのように組みこむか、という問題が残されていた。

これに対し、20世紀初頭の歴史研究は、地域的には西洋から東洋まで含み、時代的には古代から現代まで、そして、痴者教育と特別学級教育を含むという、いわゆる世界通史となった。1904年、当時、ペンシルバニア州立エルウィン痴児学校の校長であったバーは、『精神欠陥者—その歴史、処遇、訓練—』(Barr, M. W. 1904)を著した。同書の第二章は歴史の章で、セガンの場合と同じく、導入としての役割をもたされている。

ここでも、なお、歴史研究の意識、時期区分、史料批判はないが、はじめて、古代から中世にかけての精神薄弱者の処遇をとりあげ、地域的にも、西欧諸国だけでなく、日本を含む20数カ国をとりあげた。また、歴史要因として、古代、中世では迷信的処遇であったが近代から科学的処遇がおこなわれ、組織的訓練がなされるようになったという、いわゆる科学の進歩とヒューマンイズムの発展を強調した。

バーのこうした歴史観と構成は、その後の通史の方向を決定づけることになった。特に、古代、中世の前史部分は、現在においても、ほとんど、そのまま引用されている(Levinson, A, and Bigler, J. A., 1960)といっよい。その他、構成においても、その後の歴史研究は、バーがなんらかの形で試みたことを、それぞれの問題意識においてくわしく展開しただけにとどまるものが多い。こうした意味で、歴史研究におけるバーの貢献は大きいものがある。

しかしながら、バーにおいても、古代以前をどうみるかという問題、また、バーでは、少ししかふれることができなかった学業成績不良児教育史をどう組みこむかという問題が残された。後者は、まもなく、ウォーリン(Wallin, J. E. W., 1917)によって解決されたが、前者は、1960年代までもちこされた。

ウォーリンは、1917年、『知能劣弱者問題』を出版、その第1章を歴史にあてた。ここでも、バーを受けて、世界通史が試みられたが、ウォーリンは、ドイツ、イギリス、フランスの史料を中心に、後半のほとんどを、精神発達遅滞児教育の歴史にあてている。なお、これらの教育の成立期ということもあって、歴史研究としてはこな

れていないが、かくて、精神薄弱教育史は、時代、地域、領域ともに、通史の段階に達したのである。なお、ウォーリンは、①精神薄弱者処遇は、時代によって規制されることを指摘して、次の社会問題史観の先駆となるとともに、②雑誌記事、官庁報告書、統計などを史料としたり、③年譜をつくるなど、歴史研究に新しい試みを導入した。

②アメリカ精神薄弱教育史の成立 アメリカの精神薄弱教育史研究は、バーとウォーリンで世界通史に到達したあとは、アメリカ精神薄弱教育通史へと向った。世界通史についていえば、1910年代に入って、時代が更に古代から人類の創始にまでさかのぼると、史料的に更にくわしくなることを除けば、バーとウォーリンのそれをのりこえる研究は出ていないといつてよい。

しかしながら、19世紀末から20世紀後半にかけてのアメリカの精神薄弱教育の歩みは、くりかえし、歴史研究をうみだしてきた。それらは、アメリカにおける精神薄弱教育通史を目的とするとともに、①現代の政策や理論の背景の理解を歴史研究のねらいとし、②学校(施設)の成立、発展、分化、分散の過程を、③人物、方法、研究、政策の観点からつなぎ合わせる方法が生れる。しかし、④史料問題はなお、次の時代に残されるし、④世界通史で問題となった特別学級教育史との接点も、なお、模策の段階である。

1923年、ニューヨーク州慈善援助協会精神衛生委員会のスタンレイ・ポウエル・デイビスは、『精神薄弱者の社会的管理』(Davies, S. P. 1933)というパンフレットを刊行した。同書は、1930年『精神遅滞者の社会的管理』(Davies, S. P. 1930)として公刊され、さらに1950年『精神薄弱者と社会』(Davies, S. P. 1959)として改訂されるのだが、内容を歴史的に構成した最初の単行本となった。デイビスは、ここにおいて、歴史研究の目的を現行の政策、理論の背景を理解するためとし、①古代、中世はバーに依拠しながら、近代以降のアメリカの歴史を、②生理学的教育法の時代(19世紀後半)、②警告時代(1900-1915)、④現代(1915～)と区分している。こうした時期区分は、その後の追加、修正はあるが、大筋において、現代にも通用している。なお、デイビスは、各種パンフレット、雑誌論文などを史料として利用したり、また、古代には障害の程度の重い者のみが知られていたのであって、その後、産業文明の高度化とともに、欠陥欠陥の故に社会の進歩についていけない人の問題が社会化したとして、ウォーレンを受けて、いわゆる社会

問題史観を発展させている。

1930年代から1960年代にかけては、デイビスに代表されるアメリカ精神薄弱教育通史の時代であった。この時期には、歴史研究の目的は、現代の思想、政策の発展の背景を知るため(Kuhlmann, F. 1940, Doll, E. E. 1962)とされる。そして、その当時の支配的理論から、アメリカの精神薄弱教育通史を、①前史(古代中世)、②痴児学校の設立(19世紀前半)、③痴児学校の収容施設化(19世紀後半)、④優生学的警告の時代(19世紀後半～20世紀初頭)⑤知能テストの利用(20世紀初頭)、⑥施設外保護の発展(20世紀前半)、⑦地域保護(20世紀中葉)、⑧運動、研究、政策の進展(20世紀後半)と区分する。そして、研究の手法としては、19世紀前半を人物史、方法史、後半を政策史、制度史、20世紀を研究史、運動史、政策史でつなぐ(Raymond, C.S., 1944)というパターンが確立する。

したがって、こうした時期区分の視点としては、まず何よりも、科学(研究)の発展がポイントであり、それに加えて、宗教愛、ヒューマニズムが強調される。史料問題としては、文献研究の方向がますます徹底される。ハスケルは、当時の専門誌の文献動向を統計的に分析して、それぞれの時代の特徴をブラフ化する試みをおこなった(Haskell, R.H. 1944)。しかし、史料批判は、なお、次の時代にもちこされた。

このように、アメリカの精神薄弱教育史研究は、20世紀中葉に一つのパターンを形成する。すなわち、バーやウォーレンの世界通史を大きな枠組として、施設の設立と分化、研究、運動の発展、地域保護と政策化という流れでもって、アメリカ精神薄弱教育通史を構成するに至ったのである。

4. 精神薄弱教育史の展開

20世紀後半のアメリカにおける精神薄弱教育史は、通史としては、特に新しい展開はない。しかし、ひとたび、歴史が通史の段階に到達することによって、その史観、内容等に新たな展開がみられるに至った。すなわち、①歴史観、②史料批判などにおいて、バーとウォーレン以降ふたたび通史が問題にされるに至った。

まず、歴史観において、1960年代は一つの発展をみた。バーにおいては、なお、歴史は古代から始められていたが、1960年代に入って、精神薄弱者の存在は、人類の出現とともに始まる(Levinson, A. and Bigler, J. A. 1960, Knott, M. G. 1966)とされるに至る。かくて、バーらによってつくりあげられた世界通史は、人類史と同

じ時間をカバーするに至る。

こうして、精神薄弱者の処遇は、原始時代にまでさかのぼり、生存競争の敗者として苛酷な処遇をうけていた(Levinson, A. and Bigler, J.A. 1960)とされる一方、最古の歴史的記録として、紀元前1550年に書かれたというエジプトの医学パピルスが登場する。(Doll, E.E. 1962)。かくて史料面でも精神薄弱教育通史は、人類史を包括するに至ったのである。

このようにして、20世紀後半には、精神薄弱者の存在を超歴史的にとらえ、その歴史を人類史とともに始める通史が完成するが、一方では、こうして歴史観に対して、精神薄弱教育をある特定の時代の社会的、教育的問題としてみる歴史観、いわゆる、社会問題史観も具体化された。

こうした歴史観は、すでにデイビスらによって述べられているが、ノットは、1966年、「精神薄弱史」(Knott, 1966)において、次のようにのべている。すなわち、精神薄弱者の存在は、人類とともに古いが、原始時代には、多くの精神薄弱者は、ほとんど問題なく社会に同化しており、わずかに、障害の程度の重い者のみが関心をひいていた、とするのである。バウマイスターは、さらに次のようにのべる(Baumeister, A. A. 1972)。生物学的個体差は、人類以外の生物にも存在するし、こうした意味で、精神薄弱は人類の歴史と同じ歴史をもつ。しかし、精神薄弱問題は、技術文明の進歩とともに、知的欠陥の故に、社会の要求にこたえられない人々がふえたことによって社会的、経済的問題として近代社会において成立したものである。すなわち、バウマイスターは、精神薄弱問題及び精神薄弱施設は、19世紀中葉、言いかえれば、近代社会成立期の所産である、という。かくて、彼は、従来の歴史研究が、古代、中世の史料としてあげているものは、医学的なものであっても、社会問題的でないと批判し、アメリカの通史のなかに、救貧や教育などいわゆる社会経済史的史料をとりこんでいく。バウマイスター以前のアメリカ通史は、19世紀中葉の痴児学校が欧州の実践の影響ではじまったとしていたが、ここにおいて、はじめて、植民地時代以降の社会経済史的発展の法則のなかに、アメリカ通史が位置づけられるに至った。欧州の痴者教育に関する情報も、こうしたアメリカにおける内的発展要因に刺激となったのだということが、はじめて明らかにされたのである。

かくて、1970年代のアメリカ通史は、いまだ不明確ながら、人間の生物学的特徴である知的発達遅滞と、それ

が、社会的、教育的にひきおこす社会問題とを区別し、後者は、近代社会において、はじめて社会的・教育的問題となることを明らかにした。こうして、史料や歴史の構成も、アメリカ社会の発展史のなかに求められるようになる。ここに、あらためて、史料批判の問題が生じたのである。

20世紀中葉の歴史研究の第二の課題は史料批判の問題である。精神薄弱教育史もまた歴史研究である以上、史料批判はその最大の課題である。しかしながら、すでにのべてきたように、史料批判は、最もおくれで提起されることになった。

アメリカの精神薄弱教育史研究における史料批判の問題は、二つの方向から生じた。一つは、すでにのべたバウマイスターの場合であり、歴史観の問題として従来の史料観への批判に到達し、みずから新たな史料観を打ちたてようとする方向である。第二の方向は、バーやウォーレンらの通史をよりくわしく追求する過程で、史料の評価や解釈をめぐる生じた疑問から生じた。1964年、カナーの『精神薄弱者の保護と研究の歴史』(Kanner, L. 1964)は、後者の例である。

カナーのこの著書は、歴史と名づけた最初の単行本であるとともに、バー(Barr, M. W. 1904)のあと半世紀を経てあらわれた二冊目の世界通史である。ただ、その構成、史観は、ほとんどバーのそれと同じであり、内容的によりくわしくなったにすぎないが、史料批判という問題では大きな貢献をした。カナーは同書の序文で、従来の歴史研究には、断片的でかたよった史料の拡大解釈やこじつけがみられると批判し、みずから新しい史料の発掘につとめた、とのべている。すなわち、同書のねらいを、散在し、利用しにくい史料をできるだけ忠実に収集することに置いた。事実、同書は、これまでの諸研究とちがって原典、第一次史料の収集、目録化に力を入れている。

また、カナーは、精神薄弱教育史の史料源についても新しい試みを加えた。従来の歴史の史料は、医学、心理学が中心であり、それに教育学の領域が加えられる程度であったが、カナーは、精神薄弱教育を人類社会の文化現象にとらえ、福祉、行政、医学、心理学、教育学の諸領域に関係する、とした。こうした史料観は、バウマイスターの方法論とともに、精神薄弱教育史を現代社会の社会問題として把握する方向を示すものである。

上述のようにアメリカの精神薄弱教育史研究は、1970年代に入って、科学の発展とヒューマンイズムの興隆を発

展とする通史から、社会科学史観（加藤，1972）にもとづく、社会問題史的通史への方向をとりつつある。その試みがバウマイスターによる「施設史」（Baumeister, A. A. 1972）である。同研究は、その構成においては、なお、デイビスの影響の下にあり、思想、人物、制度のつなぎ合せであるが、課題として、①対象者、②教育計画、③財政、④職員、等の分析の必要性をあげているなど、一つの方向を示している。

III. 考 察

アメリカにおける精神薄弱教育史の研究は大きくわけて、四期に区分できる。すなわち、①19世紀中葉の史的関心の成立期に、その内容、構成がほぼ方向づけられ、②19世紀末から20世紀初頭に、世界通史となる。③20世紀前半は、アメリカ通史が書かれ、思想、制度、方法、政策、研究のつなぎ合せによる研究法が一般的となる。④20世紀後半は、こうした流れのなかで、時代の範囲が人類史にまで拡大されるとともに、精神薄弱問題を社会問題として近代社会の社会現象としてとらえようとする研究が成立するとともに、はじめて、史料批判が登場する。こうした過程を、史学的に検討すれば、次のようである。すなわち、考察すべきは、①歴史研究の目的、②歴史観、③史料批判、④時期区分の四点である。

まず、「歴史研究の目的」には二つの考えがみられた。一つは、19世紀中葉の初期の研究にみられるもので、「歴史」を、実践の指針や主張の根拠とするものであった。いわば、問題解決のための歴史である。これに対し、20世紀以降の支配的な目的となったのは、それぞれの時代の理論、政策、制度の背景の理解のためとするものであった。すなわち、本論への導入としての歴史である。アメリカの精神薄弱教育史研究におけるこうした目的論は、精神薄弱研究における歴史研究の位置を象徴している。20世紀中葉まで、世界の先進国として精神薄弱問題においても、常に新しい試みに挑戦してきたアメリカは、現実の問題への対処、政策の決定が最大の課題であった。こうしたなかでは、歴史とは、対策を決定するための手段ではなく、その対策を説明する方法ととらえられていたのである。こうしたアメリカにおける歴史研究の目的論は、すでに日本において、歴史研究を精神薄弱研究の不可欠の方法とする目的論へ到達していることとすこしく違っている。日本では、おくれて精神薄弱教育を成立させ、常に、欧米の理論、実践の影響のもとにおかれたという点と、理論や政策が、過去をふまえてなされ

るという点で、歴史研究が、その基礎的研究となりうるのである。こうした目的論は、すでに、アメリカにおいても、バウマイスターらによって提唱されつつある。

第二の問題は歴史観である。ここでいう歴史観とは、精神薄弱教育史を、人類史とともに始めるいわば超歴史史的歴史と、近代社会に成立したとするいわば社会問題史的歴史とにわかれる。アメリカにおいては、20世紀後半にこの二つの歴史観が成立した。精神薄弱問題を個体差の問題とし、科学とヒューマニズムの進歩を歴史要因とする歴史は前者をとり、精神薄弱問題を人権の問題とらえ、運動や政策を重視する歴史は後者に比重をかける。この二つは必ずしも対立した歴史観ではなく今後、構成、内容面で、どう統合するかということが課題となろう。

第三は、史料批判の問題である。アメリカにおける伝統的な手法は、文献中心の史料操作であった。ハスケル（Haskell, R. H. 1944）に典型的にみられるように、過去の雑誌や著書を検討し、その傾向を考察するというのが大かたの方法であった。ここには、第一次史料を基本とする歴史研究の方法はみられない。これに対し、1970年代に入って、バウマイスターは、わずかではあるが、統計をとり入れることによって、史料批判の面でも新しい試みをみせた。こうした方向は、今後一層追求される必要があろう。

最後は時期区分の問題である。時期区分とは、いうまでもなく、一般史の区分と、精神薄弱教育史独自の区分との組合せで決定される。アメリカの精神薄弱教育史における時期区分は、こうした意味で、一定の段階に達している。すなわち、20世紀後半には、ほぼ、次のような時期区分を共通のものとなしえた。すなわち ①前史（古代、中世）、②欧州の実践、③アメリカの痴児学校の成立、④痴児学校の収容施設化、⑤優生学的警告の時代、⑥知能検査の導入と普及、⑦施設万能から分化へ、⑧研究の進歩と貢献、⑨地域保護と連邦の干与とである。

ここでは、歴史の発展と問題毎の展開の組合せが、時代を追ってなされている。この時期区分をつらぬく柱は、アメリカの精神薄弱教育が、痴児学校として具体化し、その後、種々の影響のもとに、学校が収容施設化し、ついで、施設万能から、通園、コロニーと各種施設へ分化、最終的には、地域内保護を主として、施設をその一環と位置づけるという、いわば、痴児学校史（施設史）なのである。そして、これを核として、研究史、政策史がからみあうという区分になっている。したがって、今後

の通史は、それぞれの視点を明らかにしたうえで、時期区分を立て、あらためて全体の時期区分を改定する必要がある。

おわりに—残された課題—

本研究は、アメリカにおける精神薄弱教育史研究の史的考察として、特に、通史を指向する諸研究を検討した。ここにおいて、歴史研究の意義、目的、方法、課題が、かなり明らかになった。しかしながら、なお、残された課題も多い。それを個条書きにすれば以下のである。

1. 考察のところで、問題点の整理のみにおわり、その違いが何故できるのかという点への言及が不十分である。これは、それぞれの立場の研究をふかめることによって、今後に期したい。

2. ここでは主として、精神薄弱教育史の専攻論文をとりあげたが、もう一つの柱である特殊教育史の専攻論文には全く手つかずである。こうした問題は、社会福祉史、教育史、医学史など、関連諸領域の研究についても残されている。

3. アメリカの精神薄弱教育史研究の考察においても、ドイツ、イギリスの歴史研究の影響が明らかとなった。この両者は、日本の場合でも多大の影響をもっているものであり、早急に文献を収集し、考察を加えたい。

(1926年11月22日)

註：本論文では、従来の「白痴」「白痴教育」「白痴学校」にかえて、「痴者」「痴者教育」「痴児学校」という言葉を使用した。その意図は、こうした言葉のほうが、より時代性を示していると思われるからである。なお、日本の場合、石井亮一らの教育は「白痴教育」として表現されてよいと考えている。

文 献

- Barr, M. W. 1904: *Mental Defectives—Their History, Treatment and Training*, (Blakiston).
- Baumeister, A. A. 1972: *The American Residential Institution: Its History and Character. RESIDENTIAL FACILITIES FOR THE MENTALLY RETARDED*, pp. 1-28.
- Davies, S. P. 1923: *Social Control of the Feeble-minded—Programs and Attitudes in relation to the Problems of Mental Deficiency*. (National Committee for Mental Hygiene, INC. N. Y.)
- Davies, S. P. 1930: *Social Control of the Mentally Deficient*. (Columbia University Press).
- Davies, S. P. and E. C. Ecobb, 1959: *The Mentally Retarded in Society*. (Columbia University Press) (津曲・菅田・寺田・小松訳、『精神薄弱者と社会』日本文化科学社, 1974年)
- Doll, E. E. 1962: *A Historical Survey of Research and Management of Mental Retardation in the United States*. Trapp, E. P. and Himelstein (ed.) *READINGS ON THE EXCEPTIONAL CHILDREN* (Appleton-Century-Croft) pp. 21-68.
- Fernald, W. E. 1893: *The History of the Treatment of the Feeble-Minded. PROCEEDINGS OF THE CONFERENCE OF CHARITIES AND CORRECTION*, 1893, 201-221.
- Haskell, R. H. 1944: *Mental Deficiency Over a Hundred Years—A Brief Historical Sketch of Trends in This Field*. *Am. J. Psychiatry*, 1944, 104-118.
- Howe, S. G. 1848: *Report made to the Legislature of Massachusetts, upon Idiocy* (Boston: Printed from the State Edition by Coolidge & Willy)
- Howe, S. G. 1851: *On Training and Educating Idiots: The Second Annual Report made to the Legislature of Massachusetts*. *Am. J. Insanity*, 8(2), 97-118, 1851. 10.
- 石井亮一 1904: 教育小史『白痴児其研究及教育』(丸善) (石井筆子他編「石井亮一全集」第1巻 75-8)
- Kanner, L. 1964: *A History of the Care and Study of the Mentally Retarded*. (C. C. Thomas) (中野, 大井, 津曲訳『精神薄弱の教育と福祉の歩み』福村出版, 1976)
- 加藤康昭 1972: 盲教育史研究序説 (東峰書房)
- 加藤康昭 1973: 障害児教育史研究の課題—障害者の生活と教育要求—『精神薄弱問題史研究紀要』14, 1-7.
- Knott, M. C. 1966: *The History of Mental Retardation. THE NEW JERSEY COMPREHENSIVE PLAN TO COMBAT MENTAL RETARDATION*.
- Kuhlmann, F. 1940. *One Hundred Years of Special Care and Training*. *Am. J. Ment. Defici.*, 45, 8-24.
- Levinson, A. and Bigler, J. A. 1960: *Historical Review. MENTAL RETARDATION IN INFANTS AND CHILDREN*. (Year Book Publishers), 17-27.
- 三木安正, 1937, 精神薄弱児に関する研究の発展. 『教育』5 (8) (同著「精神薄弱教育の研究」[日本文化科学社, 1964] 867-885)
- 西谷三四郎 1951: 歴史 教育大学講座 29『特殊教育』(精神薄弱児) [金子書房, 1951] 206-211.
- 西谷三四郎 1960: 歴史『精神薄弱児の医学』(創元社, 1960) 170-213.
- 大井清吉, 渡辺健治, 渡辺裕子 1976: ソビエト欠陥学の成立過程に関する研究 II. 1~3. 『日本特殊教育学

- 会第14回大会発表論文集』, 1976, 17~21.
- 大石純悟・1968: 精神薄弱児教育の諸問題(3)—精神薄弱児教育の先駆者—『鳥取大学教育学部研究報告』10(1), 75-96.
- 乙竹岩造 1910: 補助学校, 補助学級の沿革並びに発達, 『低能児教育法』(目黒書店), 228-226.
- Raymond, C. S. 1940: Retrospect and Prospect in Mental Deficiency. *Am. J. Ment. Defici.*, 49, 8-18.
- Seguin, E. 1866: *Idiocy, Its Treatment by the Physiological Method.* (Published by the Columbia University Press, 1907).
- 菅田・清水・津曲, 1974: 精神薄弱教育史, 世界教育史大系 33『障害児教育史』(講談社 1974) 201-303.
- 杉田 裕 1955: 精神薄弱児の教育史, 都立教育研究所編『講座特殊教育』(明治図書), 33-60.
- 杉田 裕 1960: 精神薄弱教育の変遷, 辻村泰男編『精神薄弱教育講義録』(日本児童福祉協会) 163-191.
- 杉田 裕: 1962: 精神薄弱教育の変遷, 全日本特殊教育研究連盟編『精神薄弱児講座』第2巻(教育原理(日本文化科学社) 29-68.
- 杉田 裕 1966: 精神薄弱児教育の発展, 三木安正編『精神薄弱児の教育』(東京大学出版会), 119-128.
- 津曲裕次 1968: 精神薄弱教育史論, 『奈良教育大学紀要』(人文・社会科学), 16(1), 223-239.
- 津曲裕次, 金子喜美子 1974: 滝乃川学園の歴史—「精神薄弱者施設史研究序説—」, 『社会事業史研究』2: 15-50.
- 津曲裕次 1975: 精神薄弱教育史研究序説—白痴教育史序章—, 『東京教育大学教育学部研究紀要』21, 119-127.
- 山下 功 1970: 精神薄弱研究の歴史, 『教育と医学』18(2), 126-39, 1970, 2.
- 山下佐平 1922: 精神薄弱児教育史, 藤岡真一郎「促進学級の実際的研究」(東京啓発舎) 卷末 2-24.
- Wallin, J. E. W. 1917: *Changing Attitudes toward the Subnormal—History of the Care, Training and Study of Feeble-minded and Backward Children.* *PLOBLEMS OF SUBNORMALITY* (World Book Co.) 1-110.

Résumé

An Essay on the Historical Studies of the Education for the Mentally Retarded in the United States

Yuji Tsumagari

This is one of the studies concerning about the history of the education for the mentally retarded. The author have reviewed those studies written by Japanese (1975). In this paper the contributions by american researchers were examined.

(1) In the United States, the interest in the historical studies were already shown in the middle of the 19th century. The founders of the theory and schools for idiots, S. G. Howe (1848) and E. O. Seguin (1866) collected the historical materials and framed the patterns of modern histories.

(2) At the turn of the century, the studies aimed the world wide history, M. W. Barr (1904), superintendent of the Elwyn Training School, P. A., described the development of this education in the european countries and in the United States, as well as in Japan. J. E. W. Wallin (1917) added Barr's contribution the history of the education for the backward children in the world.

(3) In the middle of this century, american researchers concentrated their efforts upon studying the history in the United States. F. Kuhlmann (1940), and M. G. Knott (1966), both of them were presidents of the American Association of Mental Deficiency, addressed the american history, which covered from early times to present.

(4) In 1970's, new trend appeared in the historical studies in the United States. For example, A. A. Baumeister (1972) began his study saying that the concept of mental retardation and the institution for the mentally retarded were inventions of modern times. Although S. P. Davies (1959) had already pointed that the education of the mentally retarded was one of the social problems, Baumeister completed these point of view in the historical study.

This is the present stage of the studies on the history of the mentally retarded in the United States. Next times the historical studies in Germany and in England will be studied.